

定時制・通信制教育のいま



この間の経済的格差と高校統廃合は、定時制・通信制教育をより一層困難なものにさせ、矛盾をはらませ、「学び」や「学び直し」を考えている子どもたちの意欲をそぎ落とし、希望を失わせている。

遠距離通学を余儀なくされ、交通費に苦慮し、40分以上もかけて自転車を通う生徒が増加している。アルバイトも出来ず、雨や寒い日は体力が奪われる。

親の借金返済や家計を助け、また学費も自分で支払うため、いくつものアルバイトを兼ね持ちする。給食費さえ払う余裕もなく、十分な食事も取れず、疲労が蓄積し学校を休み

がちとなり、進級卒業が遠のく、そのような生徒も多い。

全日制に入学できず、やむなく定時制・通信制に入学する生徒は増加している。彼ら彼女たちは3年間の高校生活を経て、社会人として巣立つそのラインから外されてしまった。その心情をどう察したらよいのだろうか。一方では、定時制を希望しながらも、入学出来ない子どもたちが、毎年、数十人近く生まれる事態も顕在化している。

このような中でも、定時制・通信制に通う子どもたちは、クラスに友だちを作り、行事に積極的に参加し、学力を回復させ、人間関係をふくらませ、人間的不信感や自分の持つ課題を克服していく。特に不登校経験者の多くはこうして救われていく。生徒の持つ多様な経験がブレンドされ、より豊かな内容に生まれ変わるとともに、自己を解放し、生徒も教師も互いに成長するアットホーム的な学校生活、それが定時制・通信制の良さだ。

しかし、今、給食費や教科書補助等の経済支援も打ち切られ、定員を超える生徒数の中で、教育予算も教育条件も不十分のまま放置され、教師の個人的努力も限界にきている。こうして、またひとりまたひとりと、多くの子どもたちが、さらわれていく。

夜間定時制生徒の今

埼玉県立朝霞高校定時制勤務

佐藤 元

以前の夜間定時制の生徒はよく仕事（アルバイト）の話をしてくれました。忙しい自分をアピールする生徒や自分の稼ぎを自慢する生徒。文化祭では仕事で身につけた「技術」を発揮する生徒もいました。教師は生徒を、その生徒の仕事のイメージと重ねて見るが多かったと思います。

もうすぐやめるんだ

かつて仕事は生徒の成長の場でした。職場で「あてにされる」経験が自信と誇りを生み出していたはずで。ところが今、生徒から聞こえてくるのは「もうすぐやめるんだ」という声です。職場が長くつとめたい場所ではないのです。それでも生徒の多くは親に負担をかけないた

めに、家計を助けるために、困難なアルバイト探しをしながら仕事を渡り歩いています。

生徒が就く業種も変わりました。製造・建設・運輸が影を潜め、スーパー・コンビニといった販売が主流です。即戦力を求められ、土日勤務は当然。不当労働行為もたびこつてます。そのため多くの生徒がちよくちよく仕事を変えます。抗議をすれば「明日から来なくていいよ」です。面接に何度も失敗して仕事探しに嫌気がさしてしまう生徒もいます。中には原発関連の収入のいい仕事に誘われ福島県に行ってしまった生徒もいました。

「生きづらさ」を抱えて

夜間定時制に来る生徒の多くは家庭的

にも困難を抱えていますし、人生のスタートラインから「生きづらさ」を抱えています。ある生徒（成人）は自分の生い立ちを次のように書いています。

「私は子どもの頃から人とのコミュニケーションが苦手で、あがり症で：友達も崩壊状態でした。高校は一応公立を受けましたが落ちてしまい、母はお金をかけたくないらしく私立は受けられず就職しました。：翌年定時制を受けたかったのですが：許してもらえませんでした。（中略）仕事でもいじめに遭い：「消えたい」という思いしかありませんでした。それから何年間も働き、思い切って退社し、専門学校に行こうとしました。その矢先、介護していた母が、続いて父、兄が立て続けに亡くなり、葬儀やら何やらで疲れ果て、家から一歩も出られなくなり、鬱になってしまいました。（中略）いいセラピストに出会い、：時間はかかりましたが、ガチガチに固まった心が少しずつ柔らかくなって：高校に入ってもう一度やり直そうと思いました。（中略）「鬱」や「SAD」の病気を抱えてやっていくのかという不安もありましたが、定時制に入学してからはそんな心配は無用でし

た。(中略) 私は、人生は何歳からでもやりなおせるんだ、ずいぶん遠回りしたけど、今までのことは無駄じゃなくちゃんと意味があつて必要なことだったんだと思います。」

迷惑をかけたくない

生徒たちが抱える「生きづらさ」の背後には両親の離婚、死別、家庭生活での役割から疎外された「居場所のなさ」、発達障害へのケアの欠如など様々な原因がありますし、学校が彼らの生きづらさを増幅させている面もあるでしょう。でも常にそこには「貧困」が隠れているように見えます。そしてほとんどの生徒が「働かなくちゃ」という思いに追い立てられるように高校生活を送っています。授業料不徴収になる以前の調査ですが、私の学校の生徒の4割が学費を全額自分の収入から払っています。そして生徒の誰もが、「親にだけは迷惑かけたくない」のです。親に「迷惑をかけている自分」を責めているのです。

これが先進国日本の高校生のあるべき姿でしょうか。



実習風景

40人を超える

学級定員オーバーの実態

川越工業高校定時制

松岡 元

定時制に学ぶ生徒たちは多様な困難を抱えている。小中学校での不登校経験、保健室登校者、適応教室に通った生徒、学力不振や問題行動等による全日制高校中退など学習歴の多様さ。生活保護家庭、片親家庭で経済的に困窮している生徒。広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥・多動性障害、その他の心身の障害など特別な手だてを必要とする生徒。低学力や学習意欲の乏しい生徒。さらに日本語教育が必要な生徒（外国籍・帰国子女等）、15歳から75歳と年齢も多様である。身近なところにある学校で、ゆったりした環境の中で、少人数の丁寧な教育を受け、学び直すことが定時制の原点である。様々な困難はのんびりとした時間の流れ、密な人間関係の中で癒されている。

あたたかい空気に
つつまれて

映画「学校」の監督山田洋次さんがこう語っている。「学校が小さいというところが非常に重要ですね。先生と生徒、生徒同士がみんな顔見知りである。だから、大衆社会の中で、すさまじい競争だの差別だの嵐に身をさらした人たちが、ここにくると、あたたかい空気につつまれる」。映画は夜間中学校が舞台だが、夜間高校でも同じである。

2009（H21）年。吉見町にあるホールで中学校の先生方に対する西部地区高校説明会があった。各高校がブースを設け、個別に情報提供やら相談に応じる

ものだった。定時制にはお客さんは来ないだろうし、正直あまり行きたくもなかったが、かつての同僚に会えるかもしれないと軽い気分で参加してみた。ところが予想に反し非常に嬉しかったことが起きた。5、6人の中学校の先生が訪ねて来てくれたのだ。もちろん、全日制に比べて圧倒的に少なかったが。本校の入試状況を聞いたり相談するためではない。入学した生徒はその後どうしているか、大変な生徒を送って申し訳なかったがまだ続いているか、家庭が複雑な、苦学した生徒だから頑張ってほしい、よろしくお願ひします等、中学が送り出した生徒たちの情報交換の場となった。幸い1〜4年までの在校生、過去数年の卒業生も全員知っていたので話は弾んだ。細やかな指導や対応、家庭状況等もよく知っている中学校の先生方には脱帽してしまった。この先生たちのためにも、一人でも多くの生徒を卒業させたいと思った。（残念ながら誰も残っていない）。この年度から、教科指導、生徒指導が大変になってきた。

夜間定時制統廃合と生徒急増

県は「活性化」「適正規模」という名のもとで定時制高校を統合・廃校にし、多部制高校を作って大規模校化してきた。結果、ここ数年の夜間定時制は異常事態となっている。あちこちで定員オーバー、あるいは定員ぎりぎりの生徒が入学してきている。本校も川越、狭山、豊岡高校の3つの定時制廃校のあおりを受け普通科を増設(2008(H20)年度)。工業技術科(機械・電気類型)と合わせて1学年3学級となった。

この2年続きで120名の生徒が入ってきた。2009(H21)年度は普通科が40人の定員いっぱいの新入生。(工業技術科は80名定員の45名)。2010(H22)年度の1学年は普通科47名、工業技術科機械類型45名、電気類型41名。2011(H23)年度普通科44名、機械53名、電気48名(学校要覧による)。もちろん1学級である。この数字の中には休学者、履修登録していない、つまり、休学でも登校でもなく、学籍だけはあるという「無

活動」生徒も含まれている。2010年度は何とか教室に「収容」できたが、2011年度は特別教室(社会科室と旧L教室)での授業展開となってしまった。

名前を知らないストレス

今年度(2011年度)、私は1学年の授業を受け持っていないので120人の新入生は殆ど知らない。初めての経験である。名前を知らないこんなストレスを感じるものだと知らなかった。工業技術科の教員は普通科、他類型のクラスは受け持たないので生徒の名前を覚えてづらい。同じようにストレスを抱えているだろう。また、私服あるいは作業服だと生徒なのか部外者、それとも全日制の生徒・職員なのか区別がつかない。生徒になりすまして堂々と校舎内に入ってくる、あるいは給食を食べてしまう出来事はこちら数年のことである。

人数が多いと大きな声で話さなければならぬ。私語が多く、多動で静かに聞けない生徒が複数いると、騒々しく潤いがない空気になる。寡黙、無口。蚊の鳴



授業料無償化渋谷パレード

くような声。自信のなさ。人を避けるような態度の生徒。他方では「死ね」と職員にも平気で言う者。すぐにぶつかり喧嘩になるのもコミュニケーションがうまく取れないからかも。

ある事件を通して 見えてくるもの

昨年度、入試・入学式の時じろじろ見られたというのがきっかけで1学年3学

級を巻き込んだ暴力事件が起きた。学校をかき回したあげく、関わった11人の内9人が退学していった事件の余波を受け、各クラスは1学期中落ち着かず、理想のしつとりした雰囲気からは遠いものだった。欠席者も増え、担任団はモグラたたきのように毎日電話をかけた。生徒と話したり、保護者から状況を聞くだけではない。「どうしたらいいんでしょうかね？先生」。こうなると、1件の電話に30分かかることはよくある。問題行動を起こす生徒たちに振り回されれば、目立たない生徒に対して疎かになりがちになる。

以下はその時の検証・総括の一部である。(県教委主催の「定通教育研究協議会」で発表済み)

①定時制を取り巻く環境、例えば、入試制度、学級定員数、職員数、学校規模、施設等がもう少しよかったら、仮定ではあるが事件は回避できたかもしれない。

②第1次欠員募集の普通科で不合格者が出た。調査書の成績からすると、本来定時制に来るべき生徒ではなく不本意入学の生徒が多かった。今回の「事件」の発端である後期募集でも、例年以上

の受検者人数であった。早めに進路先を決めたいと考えた中学校の「安全策」が理由のひとつと考えられる。11人中7人が後期募集受検者であった。

③加害者は4名、被害者は4人全員、それぞれ同じ中学校出身であった。40校近い中学校から来ているが、同じ中学校からこの人数が入学することは異例である。複数人來ている中学校には、春休み中に学校訪問し情報を集めている。中学校の先生方からの生徒情報は的確であったにもかかわらず、それを活かすことができなかつた。入学早々に個人面談を行っていたが、1クラス40人では対応できなかつた。

④日々の雑務に追われ、クラスの一人ひとりに心配りすることは困難である。定時制は単学級で、全職員が全生徒と関わるような環境が望ましい。現状の複教科、各学年3学級。しかも1学年40人以上では担任の負担が大きく、なり手がなくなることが懸念される。(実際臨任が増えてなり手がいない)。

⑤単位制高校では各クラス、学年が分断され、担任が全責任を負わざるを得ない状況にある。1年生にだけ「学年団」があるが機能していない。どの教員も

複数の学年に出ており、今回のような事件が起きてても、「学年団」の教員で対応することは困難であり、臨時で学年会を開くことはできない。また、自由に使える部屋が限られており、今回のような事件が起こると職員不足で対応できない。

私たちの望むもの

入学式から欠席の生徒がいる。初日から、いや、受検日から圧倒されて、足がすくむことがあつたかもしれない。不登校経験者は7割もいる。入学当初はお互いが「見えないブース」に閉じこもっているように孤立している。内にこもってしまう。もっと感情を出してくれよ。いや出させるのが私たちの仕事？

バカにされたり、コケにされてきた経験があるのかもしれない。勉強が分からず、取り残され、授業中は机に向かって座っているだけだった生徒たち。理解しなくても分かりませんと言わない。言えない。40人もいたら言えないだろう。さんざん置き去りにされ、切り捨てられ、定時制で学び直したいと思つて入学して

きたのに、ここにも居場所はないのか。ここでも見捨てられる？言える人間関係を構築するには、言えるような学級人数が前提条件。20人学級が理想である。

学校は実に面白い空間である。生徒から見て兄姉、父母、祖父母のような年齢の先生がいる。同年齢の仲間がいる。ある定時制高校の教員のふっと漏らした言葉が印象的であった。「単学級の先生の方が、そうでない学校の先生よりも優しくなれる」。別の教員曰く。「生徒に怒られるようになった。生徒は先生をしかって成長していく」。

3年生になってもまだコミュニケーションできない生徒もいる。相談にのってくれるカウンセラー、悩みをきいてくれる相談員の配置も不可欠。10校にしか配置されていない多文化推進委員も希望校全校に配置して欲しいものである。

2月20日(月) 山口県光市の母子殺害事件の判決が出た。発生から13年。最高裁は犯行当時18歳1カ月だった被告(30)に死刑の判決を下した。4人の裁判官のうち1人が反対を唱えたという。「人は人の関係の中でしか成長しない。人間的成熟が12歳程度で停滞しているのであれば、そのまま拘留所で8、9年過

ごしたとして、反省・悔悟する力は生まれない」。玩味すべき言葉である。

2012年度入試が終わり、本校でも欠員補充が行われることになった。また、高い倍率が出るかも知れない。(昨年度は普通科5名募集に13名、工業技術科16名に対し36名だった)。受検生の大部分は全日制に落ちた生徒。入ったとしても不本意入学。現状を受け入れるには時間がかかるだろう。全日制は全日制だけで欠員補充をし、「定時制に通わなければならぬ理由のある生徒」だけを受け入れる制度にできないものか。

今年度、草加高校定時制は倍率が出ている。にもかかわらず、県は統廃合の決定を変えようとしていない。学ぶ権利を奪う教育行政ってなんだろう。



文化祭

夜間定時制高校の給食室

埼玉県立浦和一女高校定時制 事務職員 近藤 満

夜間定時制高校には生徒のための給食があります。専門の栄養士が献立をたて、専任の調理員が調理し、生徒は専用食堂で夕食をとります。給食時間は始業前の25分間と1時間目と2時間目の授業間の休み時間の20分の2回です。短い時間ですが、生徒にとっては友達と語らいながら食事する楽しい時間です。

名前と顔を覚えて

私の学校の給食室では、配膳カウンターの厨房側の壁に生徒全員の顔写真の一覧を貼り、生徒の名前と顔を覚え、声かけをしたり、食堂内での生徒の状況を把握するよう努めています。（もちろん事務室にも同じものがあります）。

盛りつけは生徒が来てから始めますから暖かいものは暖かく、冷たいものは冷たくと、生徒がおいしく食事を出来るように心がけているだけでなく、特に小食な子が多い新入生に対してはひとりひとりの摂食量を把握し、食べる量の変化をつかむ等、生徒の成長に心を配っています。主菜は生徒の食べる量に合わせ何通りか並べ、主食は一人一人食べる量を聴きながらよそいます。一年生は最初はとも小食だったけれど、二学期も半ばになる頃、みんなびっくりするほどよく食べるようになったと栄養士が話してくれました。

「頂きます」も「ごちそうさま」も言えなかった新入生もやがて配膳のカウンター越しに栄養士や調理員と言葉を交わすようになります。定時制の生徒にとっ

て給食は食事をとることにとどまらない大切な役割を果たしているのです。

県の冷たい仕打ちが

生徒が負担するのは材料費だけで、私の学校では平均1食275円の予算です。年額を12等分した額4400円を毎月納入します。しかし、定時制では、学校納付金の中で給食費が一番大きく、この額も大変だということと給食をやめる生徒が増えてきています。以前は、年間90日以上働く生徒に対しては一食75円の補助がありました。県の財政当局が「正規に働いている生徒が少ない」「定時制の生徒だけ優遇されている」という「理由」をつけて2008年度から廃止されてしまいました。現在の雇用状況を全く顧みない冷たい仕打ちとしか言えません。

粘り強く県と交渉

給食の調理作業を補助するためにパート職員を雇用しています。勤務時間は家

庭の夕食の時間にかかりますし、給食のない夏休みなどの長期休業中は全く収入がないため、働いてもらえる人を見つけてみる事はとても困難です。

しかし、県が「雇用の機会を多くの人に広げるため」などという「理由」を付けて同じ人をパート職員として雇用する期間を2年間に限定したため、県教委も2012年度からのパート職員の「雇用止め制度」を埼玉県に提案してきました。埼玉県は、県当局との地公労交渉でこの問題を取り上げるとともに、県教委との交渉を重ね、校長の判断で雇用を継続することが出来るようになりました。求人への困難さに加え、調理の衛生管理を徹底する上で経験を積んだパート職員の雇用継続はとても深刻な問題なのです。

夜間定時制の給食は、子どもたちの成長にとって重要な役割を果たしているのです。県財政局は、子どもたちが置かれている状況にもっと目を向けてもらいたいと思います。



夜間定時制給食室

「なんととしても高校だけは卒業

したい」の思いをうけとめて

通信制高校の現実と課題

多様な形態の高校教育の実現をめざして設置された通信制高校。

そこには、いじめにあったり、人間関係がうまく結ばなかったりして、不登校になった生徒や、学力が追いつかずに進学した高校をやめた生徒たちなど色々な子どもが学んでいます。そしてどの子ども「なんととしても高校だけは卒業したい」という思いを強く抱いて入学してきます。

しかし、卒業したいのにできない現実があります。なぜ卒業できないのか、課題はなにか。大宮中央高校通信制課程の現場教員から現状と課題を報告していただきます。

4075人も在籍

大宮中央高校の生徒の在籍数は、1年生が482人、2年生が664人、3年生が755人、4年生が723人、合計2624人です。5年生以降の生徒を「以前生」と呼んでいます。合計1451人おり、あわせるとなんと4075人が在籍しています。

ものすごい在籍数ですが、それはまた「なんととしても高校は卒業したい」という思いの表れであり、反面卒業できない課題が山積している証でもあります。

過去3年間の入学者数と除籍者数を見てもみると、

入学者数は、09年度が906人、10年度が1044人、11年度が949人。

除籍者の数は、09年度が386人、10年度が364人、11年度が441人です。

また生徒の中には他の高校からの転入も多く、転入学する生徒数の内訳は、10年度の新入学が529人、転入学が515人で、合計1044人です。11年度は、新入学が492人、転入学が457人で、合計949人です。

学校はどうみているか

大宮中央高校通信制の学校自己評価システムシートによると、現状と課題として次のように記されています。

- ・働きながら学ぶ生徒が減少し、高校中途退学の生徒、不登校経験の生徒、集団に溶け込めない生徒、外国籍の生徒が増加している。

- ・進学、学び直し、資格取得等、学習目的も様々であり、学力差も大きく、求められている学力範囲も基礎基本

から進学対応まで幅広い。
・入学生徒数予測の困難度が増している。

社会生活への不適応が

生徒らが抱える困難な点、例えば、経済的な貧困、家庭環境、いじめなどの精神的なストレス、学力不足などが考えられます。さらに日常生活をおくるための「力」「技術」が身につけていない実態も浮かび上がりました。

生徒たちの多くは事務的なことができない。例えば、○月○日にスクーリング、Aの科目は、レポート締めきり○月○日などのメモをしっかりとれない。あるいは、きちんと朝起きて食事をとるなどの生活習慣、社会的な基礎などが身につけていない。

長期・短期の人生の目標をもてない、人に愛されたり、愛する心ももてないように見えます。学ぶ意欲もなく、高校の資格をとりあえず欲しがる以外は何もないと思わせるような生活をおくる生徒が多いです。

新入生の6割以上が不登校経験者であ

ることが、社会（学校）生活への不適応を引きずった状況を生み出しているものと思われま

す。在籍者が4000人もいる状況では、もう1人ひとりを把握してられないし、把握したとしても、あまりに問題が大きすぎてまさにパンドラの箱を開けてしまうアイロニーが生まれることになり

ます。先の学校の「自己評価」の中でも
・基本的な生活習慣や公共心、マナー等の育成を必要とする生徒が一部存在する。

・自己表現能力やコミュニケーション能力の不足等から良好な人間関係を構築しづらい中、悩む生徒が多い。と指摘しています。

生徒同士や先生との交流もごく僅かしかなく、学び合いの機会も少なく、生徒一人ひとりを成長させるための教育がな

レポートが書けない

やめていく生徒の理由についての統計はないようですが、各学年の科目のおおよその習得率は次の通りです。1年次約35% 2年次 約55% 3年次 約60% 4年次約70%

なんといつでもやめていく理由の第1はレポートが書けない（意欲すらなくしてしま）ことにあります。

大宮中央高校では、1年次で7科目を受講します。それぞれの科目にレポートがあり、科目にもよりますが、6〜8冊（1冊8ページ程度）を1年間で仕上げ（完了）こととなります。それに加えてスクーリング（授業）に1年間で、それぞれの科目4時間〜8時間程度出席することになります。

アルファベットが書けない、九九がでないなど基礎学力のない生徒は、そのレポートを見ただけで意欲をなくしてしま

まうのだそうです。
第2にそういう本人を支える友だちや家族がないことも大きい問題です

何が求められているか

現状から考えると、通信制高校を卒業するためにはサポートが必要ですが、サポート校に通っている生徒は50人〜100人程度です。(スクーリング中に手を上げさせた結果の予想より)

最後に通信制高校の課題や問題点、願いについて伺いました。

(レポートは優秀で全部提出完了できないのに)不登校でどうしても学校に来られない生徒などの現状を考えれば、スクーリング必要最低時数を軽減することも検討すべきなのではないか、ということです。これは文部科学省への要望なのですが。

毎年400人以上の生徒が、色々な困難を克服しつつ卒業していく反面、一般には全く知られていませんが、毎年400人程度の生徒が除籍という名の退学に追い込まれている事実を知って頂きたい。そして安易に通信制に行けばなんとかなるといふ幻想を捨ててほしい。きちんと自学自習ができない生徒には向いていないということを再度強調したいで

す。

小学校の教え子に3年間中学校に通えず、単位制による通信制に学び、大学に進学した子がいます。今回の話を伺って私自身、通信制高校の深刻な実態について知らないことが多く、また課題の多さを痛感しました。

(編集委員 山内 芳衛)



バーベキュー

通信制高校生Mさんとの2年間

さいたま教育文化研究所

並木 たい子



出会い

2年前の春、通信制高校で留年をした人が相談に来るといので一緒に立ち会いました。レポートが出せずに留年したとのこと。今は、アルバイトもしたいので、コンビニの面接を申し込んだということでした。

Mさんには発達障害があり小4から学校を離れ、中学校は数回の登校で卒業し、すすめられて通信制高校（通信制・単位制）に進学しました。自ら不登校を選んだわけではないのですが、長い在宅の生活で昼夜逆転の生活を送り、社会とのつながりはパソコンのインターネットを通じてが主でした。2歳でひらがなを読んでいたというMさんは、本を読むのが得

意で、物事の判断には合理的な考えを持ち、明るくくつたくなかない素直な性格です。こだわりも強くありませんでした。

通信制高校の生活を一緒に体験

私には通信制高校の具体的なイメージがありませんでしたので、Mさんと一緒にレポートの提出期日等を調べて、レポートの作成につきあいました。科目とレポート回数、提出期限の一覧表を作成し、提出記録をつけるようにしました。Mさんは、学習手帳を読みこなし、一覧表をつくりあげました。レポートは毎回自分の力で仕上げ、提出すればよい状態でしたが、提出記録はつけていませんでした。中間テストを受ける直前にそのこと

が分かり、慌ててレポートをチェックしたところ、レポートの住所記入欄が空白で、住所を聞くと知らないとのこと、母親に住所を聞いてくることを宿題にし、私は生活全般を見直さなければと思いました。

その後、中間テストに向けて重要ポイントやテスト勉強の日程の立て方等細かいことを一緒に確認しました。最初の頃は、日程に合わせた生活を送ることや内容を覚えることに抵抗感があり、「やらなければいけないのか。」と私に聞いてくることもありました。中間テストも合格し、試験勉強を体験したMさんは安心して「留年はないですよね。」と言っていました。

運動会や体育の授業も、久しぶりに同年代の人との出会いを楽しんでいました。体育でのエピソードは、発達障害の

人にありがちなことでMさんも「相手の人は、頭をたたかれたり、ラケットを投げつけられたり、球拾いばかりでたいへんですね。」と明るく笑って話してくれました。

レポート作成は、数学以外はほとんど自力で教科書や参考書を読んで書いています。分からない時の最後の手段は、教科担任の先生に質問をして答を聞き、その場で書いて提出してくるというMさんです。通信制高校の先生もこのMさんの行動に快くつきあってくれているようで、さすが慣れていいるなど感心しています。

アルバイトの実現に向けて

アルバイト先からは採用の連絡もなく、Mさんの「アルバイトをしたい」「働きたい」という願いを実現するためには、自分を見つめること、発達障害と向き合うことを避けて通れないと思いました。今までの自分を見つめることは、Mさんにとってつらいことかも知れませんが、自分を知るよい機会にもなると考え、お母さんに生まれてからのことを書いても

らいました。また、Mさんと一緒に自分の生い立ちを写真をまじえて、「私の成長の記録」をワープロで作成し、苦手なこと、得意なこと等も書いてもらいました。

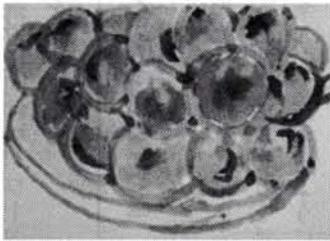
アルバイト先の面談をふり返って、言葉遣い、身なり、生活リズム等も話し合いました。こうして、外出時の忘れ物等の確認、生活リズムの確立に向けて犬の散歩等を盛り込んだ「生活チェック表」を作り、自分で自覚して取り組めるようにしました。はじめた頃は、チェックを忘れ、勉強道具、ハンカチ等を持たずに来ることもありましたが、だんだん自覚的になってきました。時々、チェック表を前に二人で振り返って、更に自分でできることを増やしていこうと、掃除や調理等の項目も入れました。研究所に来た

ときは、お茶入れや後片付けもお願いました。また、Mさんの楽しみの一つのお菓子づくりで、他の人に食べてもらい、自分の得意な事で人にほめてもらう経験をしてもらいました。

Mさんにとって一番つらいことは、アトピーや環境への適応でした。通ってくる満員電車もつらいことで、「グリーン車」を使ってもよいかとお母さんに話しましたが、お金が続かないと断られ、我慢して通ってきています。スクーリングで登校しても、気分が悪くなり、すぐに帰ってきたり、1、2時間参加して帰ることが多く、一日学校にいられることはまれでした。それにアトピーが重なった時は、見てもつらさが伝わってきて、体調を維持することは大変だと思いました。このつらい状況をすぐには解決できないけれど、生活リズムを整えて、体力をつけていこうと話しました。

発達外来へ

Mさんとお母さんに発達障害に関する本を読んでもらいました。特に就労支援に関わる本は、情報として伝えたかった内容です。感想を聞くと「自分と同じこ



とが書いてありました。「子どもと同じでした。」と心当たりがあることが分かり、これからの就労には、手帳があると支援を受けやすいことを理解してもらいました。

Mさんの作った「私の成長の記録」と私が作成したMさんの生育歴（学校での様子、療育や診断の経過、Mさんの当時の気持ち等をまとめた）を持って、発達外来を訪ね、手帳の申請をしました。手帳の交付を受けたからといって、すぐに支援を受けられる社会資源は整っていないのですが、就労につながる道に穴をあけられればと考えています。

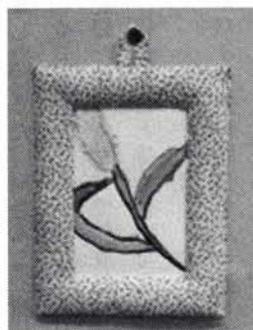
まず、はじめに発達障害を対象にした就労支援センターにお願いして、Mさんに現在どんな制度があるのかを説明してもらいました。利用できそうな就労訓練制度は、今のMさんの体力では難しそうな仕事でしたが、「一緒に考えていきましよう、また、相談にのります。」と聞いていただいたのは、この先の就労への希望をつないでくれました。また、「今できることは、毎日の生活リズムを整えること、自分でできることを増やしていくこと、勉強をしつかりやることです。」とMさんを励ましてくれました。そして、

Mさんは就労に向けて、ワード、エクセルの習得を始めました。

生活を広げること

学習支援だけでなく、Mさんの得意なことを生かして生活に彩りを添え、将来の生活を楽しく送れるように、レポート提出が終わった夏休みや春休みを中心に、物づくりに取り組みました。

絵を描くことが好きなこと、人形等を作っていたことを聞き、ロープ人形、絵手紙、額縁づくり等をやりました。全体像をとらえることが得意なのと手先が器用なので、作品はすぐにできあがりです。周りの人にもほめてもらえて自信をつけることもできました。自分からエプロンを作りたいと、提案をしてくる積極面も出てきています。食べることに興味を持っているMさんは、インターネットや図



書館でレシピを探して、お菓子作りに取り組み、苦手な野菜をスープにしたり、工夫して食事づくりも楽しんでやりました。

ちひろカレンダーを見て、「かわいい絵ですね。今度行ってみます。」と興味を示し、出かけることにも積極的になってきました。

2年目が終わる、今

「2年目も単位が取れました。」と報告してくれたMさん。続けて「パソコン使ってもいいですか?」と言ってパソコンに向かい、「レポート提出表を作ってみました。」とエクセルを操作していました。何が始まったのか理解できなかった私は、Mさんの作っている表を見て分かりました。それは、今まで私がMさんに作って渡してきたレポート提出チェック表



〈スコーン〉

(文中の写真は M さんの作品)

でした。自分で3年目の計画を立てはじめたのです。今までには考えられないことでした。お母さんの連絡帳には、「信じられないことが続いています。このところ3日間、Mが夕飯を作ってくれています。とても、うれしいです。」「まだ、夕飯づくりが続いています。」「Mさんの成長を喜ぶ気持ちが続いてあります。た。

2年目の誕生日を迎えた後から、変化が見られました。18歳の誕生日は、タルトケーキでささやかに祝い、次の成長を楽しみだよと研究所のみなさんが声をかけてくれました。

今まで、お母さんが駅まで車で送迎をしていたのですが、自分で自転車で通うようになり、一歩を踏み出しました。お

母さんの仕事にもついて行き、一緒に働くことが見られるようになりました。何か一皮むけた感じがします。お母さんは、周りが見えるようになってきて、物事を計画的にすすめるようになってきたと話しています。Mさんに聞くと「他の人のために、何かすることがうれしいんです。」と答えてくれました。

通信制高校に 求められること

Mさんの支援を通して、通信制高校の在り方を考えさせられました。単に単位を取得し高校卒業の資格をとるだけではない、青年期の自分づくりの時期をいかに過ごすか、その支援が通信制高校のシステムの中に準備されていることが重要なのだと思います。

現在4000名を超える在籍者の中には、多様なニーズを要している生徒がいると思います。スクーリングや部活動等もあるようですが、それだけではない支援の場があったらよいと思います。学習支援、生活支援も含めた集まれる場、仲間と交流できる場、自分を見つめ、自己肯定感をうみ、将来の希望へとつないで

くれる場が必要です。相談できる人がいて、仲間もいる「リソースルーム」や「サポート教室」のようなものは考えられないでしょうか。

また、卒業後の進路、就労保障も視野に入れた、就労体験も含めたキャリア教育もカリキュラムとして含まれる通信制高校の充実が求められています。

おわりに

明るい性格で高校生活を楽しめるようになったMさん。Mさんを支えてきたお母さんの存在も忘れてはなりません。Mさんの障害を受け入れ、家計を支えてきたお母さんの後ろ姿を見て育ったMさんは、身体を動かして働くことに喜びを持ち始めています。この気持ちがMさんを成長させてきたように思います。このレポートをMさんに読んでもらい感想を聞くと「自分の成長が分かりよかったです。」と言ってくれました。自分を客観的に見る目も育ってきています。

Mさんたちの就労への道はまだ狭いですが、自分の力を社会の中で発揮できる場所が実現するよう、私も力をつくしていききたいと思います。